

## メディアの多様化による地域像創出の変容 ——湾岸戦争報道から——

小林 祥子

この論文は、メディアを通じた二次的間接情報源に関して、湾岸戦争を事例に、その重要性・中心的存在への推移を検証すること、またメディアが拡張していくと共に、人間の知覚や認知の過程がどのように変化しているのかを調査することに意義を見出し、時間的・空間的な現実認識について議論することを目的としている。

「メディア空間文化論」を用いて、メディアを通じた情報や経験に多くさらされている現代社会の情報環境において、メディアの伝える情報は副次的なものではなく、正に中心的であるという著者の見解を裏付けるものとした。

ラジオについて、第二次世界大戦下でヨーロッパ大陸の「空間」を結ぶ5つの中継番組を、「同時」に放送することに成功したことを検証し、放送メディアの現実の再構成能力について言及、娯楽メディアとして誕生したラジオやテレビに、ジャーナリズム機能が認められたことを検証した。テレビジャーナリズム台頭の背景にある通信放送技術の発達の歴史を追った。「地理的条件」による時間の壁が消滅したことを検証した。

マスメディアの拡張は輸送手段の改善と共に、プロパガンダの利用と効用を増大させたことに触れ、ベトナム戦争、フォークランド戦争を事例に、そのプロパガンダ性について検証した。

コンバットプール、報道ガイドラインの存在、報道陣の撤退命令、映像の検閲などを検証した。攻撃が軍事施設だけに限られていることを強調したピンポイント攻撃の映像などを調査し、ジャーナリズムの監視機能、国籍の問題などに触れた。橋元らの先行研究を引用し、二次的な経験によって得られたものが、価値基準として機能しているということを実証し、現実、リアリティーとの隔離への危険性を提示した。

ゲーリーの「人間は何が本物で何が作り物なのかを、識別できると思いがちである」という引用により、個人は現実社会を解釈しその中で行動するためには、時間と空間の両観念に頼らざるを得ないが、メディアの持つ現実の再構成能力が、メディアの進展と共に増大していく現代の情報環境のなかでは「虚構」と「現実」の区別が曖昧になってきていることを指摘し、その危険性を提示した。

マクルーハンの空間性と時間性の消滅という発達したメディアの特性を実証し、グローバルメディアの問題点を提示した。エスノセントリズムは先進国、第三世界を問わずジャーナリズムの属性であること、また視聴覚メディアであるテレビは、「文化的帝国主義」の問題を増大させていること指摘した。

## 1990年代の東京都内における情報サービス業の立地変動

山田 弥生

(本誌掲載の論文を参照)